

生活とアートについてのドキュメント

1944年 私の生まれ落ちた時の日本は食べ物はなく、疫病は流行り、荒廃のどん底でした。多くの人が治らない病気にかかりました。大人も子供も餓えと病気で死んで行きました。大人達は一生懸命働いていました。第二次世界大戦によりアメリカの空からの無差別攻撃を受けた日本のほとんどの都会は焼け野原となり人々は生活の立て直しの為に不幸から立ち直ろうと貧困と飢えと闘う人間の必死の姿を見て育ちました。充満した草いきれの蒸れる湿った田の畦で呼吸をしていた生の記憶、父母の愛と自然の恵みをあり余るほど受けた幸福な静謐の時、それは1、2歳の束の間の夢だったのだろうか。日本中の多くの赤子の至福の生は、裏切られたのです。私の2歳と3歳の妹と弟も虫けら同然に死んでゆきました。父も私が4歳の時34歳の若さで結核に犯され他界しました。日本中の老年、壮年、青年、婦女子、何百万もの人々が殺されたのです。この悲惨はアジアの国々にも及ぶ、軍国主義の野蛮な時代でした。

もの心のついたときは、母も病に倒れ、片肺とその肋骨を失った母と弟と共にシェルターなど転々とした後の祖父母の家で暮らしていました。貧乏で居候の身ではありましたが、祖父母家族の加護のもとで高校卒業までお世話になりました。いつの頃からか意識の目覚めと共に、この幼年のトラウマは覚醒を始め、漠然とした憎悪と悲痛は恰も背骨の髄にまで染み付いたごとくに感じられ、絶えず微かに震えるバイブレイションの波となって、襲われているという不安の感覚の中に生きながらも、とにかく何がなんでも生き抜かなければならないと、思うようになりました。同時に多くの人の助けに導れ支えられてこの地獄から這い上がるように生き延びることが出来た生の証しを礎にして、この生きる力を社会に返すことができたと思う強い衝動が次第に私の心に湧き上がってきました。”加害者と被害者”の現実を知った“憤怒と感謝”この表裏をなす一見歪んだ”なまの感情”こそ、私のアートの噴火の原点です。”加害者と被害者”は私の作品のテーマでもあります。これしかできない、これしかないという、生命体が掴んだぎりぎりの表現へのこだわり、何ものにも代えることのできない”存在のリアリズム”これが私のアートの本質です。アートが人々のアートになって生きて欲しいと強く望んでいます。作者不詳でも人間の作ったアートとして歴史がある限り人々の中で生きて行く、風化してもぼろぼろになっても乗るり移った魂の原型を保つて。公金を私有化し数々の政治罪悪が創り出す有象無象の作品群の充満する見苦しく汚濁にまみれた、悪臭を垂れ流す似非芸術家の墓場と成り果てた現代美術館又はその類いの中ではなく、生きている人間の身体の中に住み生き続けていく作品を作りたい。それは私の命がけの夢です。中学、高校、大学、と進むと共に次第にアート

の魅力の虜となり 底知れない無限の深みを感じ、次第にビジュアルアートだけが持つ特有の表現が自分の体質、素質に合っているのではないかと思い始めました。私の田舎でも1学年300人以上いました。その中で大学へ行った生徒は10人前後でした。誰も彼もが早く働きに出て家族の助けをしなければ生活出来なかった時代だったのです。その点私は親不幸だったのです。既にアートの虜に成っていました。自分で働いて美術学校に行きたい。最悪の場合でも教員になれると母親に懇願したのです。怖い物知らずでした。1週間で新聞配達の仕事を見つけました。お金が足りません。皿洗いも同時にしました。それでも足りません。3ヶ月後、夜の仕事であるサンドイッチマンの仕事を見つけました。1晩600円位になりました。なんとか食って行けました。吹きつける冬の雨、風、雪の厳しさを知りました。親方は腰を痛めて引退した元相撲取りでした。四股名を荒磯、元関脇だったと云い、貧困で寂しい彼に人生の零落をみました。裕福で東京の大学へ何人かの息子達を送った窯元の親を持つ私の友人が、美術学校へ行きたいと父親に告げた時、彼は息子に”行ってもいいけど、畳の上で死ねない覚悟で行け”と言ったそうです。一流以外は食えない。相撲取りも横綱に成れなければ悲惨です。少なくとも昔は。そおいう芝居もあるほどです。芸術家にとっても一流か乞食しかない。中途半端は見苦しい。覚悟をしておけという意味です。親方は糖尿病を患い、だんだんと目が見えなくなりました。中央線荻窪辺が私と親方の仕事場でした。彼は隣の駅、西荻窪から歩いて15分位の借家に住んでいました。ある日大手の商社が彼の家一帯を買い占め、追い出される羽目に陥りました。仕事を始めて3年目位の時でした。彼には妻子は無く荒磯時代のファンの女性と暮らしていました。二人は60代前半だったとおもいます。この頃から彼は私を実の子のように頼っていました。借家探しを頼まれ、彼の仕事場荻窪から中央線で6つ目の国分寺を見つけました。彼の足で駅から30分位の所に、庄屋さんの敷地内にある10軒位の並びの1つが見つかりました。彼は片足不自由でしたが、駅からバスもありました。私の下宿も国分寺から乗り換えて2駅でした。心配でしたが引っ越してなんとか住んで自分の仕事もこなしてくれました。ちなみに親方の受け持った店は”おかめ”というおでん屋は井伏鱒二、太宰治、中原中也等文化人が出入りした店であった事を後年知りました。親方はこの仕事を何十年も続けている感じでした。親方は長い間、立つ事が出来ませんので1時間に1回5分位”いらしゃいませ!おかめでございます”と中腰で2、3回くるくるとプラカードを回して甲高い声で突然元気が出たように叫ぶのでした。4時間の内15分位働いて後はパチンコ屋の大きなエアコンの前で冬も夏も座っていました。時々四股を踏むのでした。それでも店主は義侠心の強い人で、気持ち良く支払いをしました。きっと店主は彼の現役時代

からの谷町、パトロンだったのだと思い胸が熱くなります。1985年、15年ぶりに日本を2週間、訪問しました。早速親方を訪ねました。彼も彼女も他界していました。しかも彼の遺骨の引き取り手が10年程なく3年前やつの事で甥御が引き取りに来たことを、家主さんから聞かされました。庄屋さんとの家を借りる時の掛け合いで、その老人夫婦は身寄りがあるかと聞かれ、ありますと答えた事を思い出しました。親方の為の必死の掛け合いだったのです。ムサビを卒業した時親方にもう1年やってくれないかと頼まれた事、生まれて初めて洋食屋でごちそうになったこと、渡欧するとき親方から1万円の賤別を貰って、母親から返してこいと叱られた事など思い出され、掛け替えの無い月謝を払っても学ぶ事の出来ない大切なことを教えてくれた、今は亡き私の先達である底辺にいる人々の心を、日本の伝統である”和の心”を大切に生きて行きたいと思うのです。私の美術学校時代のこの親方ともう1人、同年齢位の大事な師匠、清水多嘉示がいます。彼は1920年代ロダンの弟子のブールデルのもとで5年間修行した人です。ロダンの孫弟子でもあるわけです。彼との出会いは学校の面接試験に始まります。この時の先生との会話が私に一生かけても尽きることのないアートの可能性が深淵であることを説いたのです。”君はこの学校で何を勉強したいか” ”3次元の勉強をしたいと思います” ”4次元もある” と私に告げたのです。この4次元のアートは彼のパリでの仲間達が切磋琢磨し新しいアートのテーマとして意欲的に制作、発表しました。マルセルデュシャン、ブランクーシ、アルプ、ロッソ、ダリ、ボッチオーニ、ピカソ、ブラック、アルプ 清水先生のクラスメートであるジャコメッティ、ザツキン他多くの作家が鎬を削りました。この作家達はパリに限らず又ダダイスト、シュールリアリスト、イタリアフュチヤリスト、キュービスト、ロシア構造主義等ヨーロッパの殆どの当時の前衛が関わったのです。

因に私はグレコとセザンヌの絵画にも4次元を強く感じます。先生の4次元は私に強烈な啓示となり、アートの永遠性のテーマとして私の中に次第に膨らんで行く事になります。私の現在進行中の作品”10年間イターナル徘徊パフォーマンス”は50年以上前のその4次元に源を発しているのです。その4次元はモデルを見て作る塑像、具象だけがアートではなく、見えない事物を表現することも含めて、アートではないかと私は感じたので。結果的にはこのムサビの面接試験でライフワークとしてのテーマを与えられたと言っても過言ではありません。清水先生のアート哲学が18歳の私の無垢の感性に響いたのです。暗中模索の長い葛藤の始まりでした。クラスの人たちは皆塑像でしたが、私は塑像も含め色々な石、木、鉄、石膏直付けを使つて、模索する色々な表現を試みました。それでも先生は人が鼠を採った猫を褒めるように、”よくやった” と励

ましてくれました。もっと頑張れと言っているように感じました。私の姿勢は学校の外のアーティストが持つような制作態度だったと思います。ちなみに私が親しくしている篠原有司男氏は芸大生の時、胸にナイフが突き刺さった絵を林武という教授に見せた所”君は学校を退めた方がいい”と言われ、退学しました。清水先生の方が林武よりアートに対する理解が遥かに深いと思われまます。ヨーロッパで長く勉強してきた人とそうでない人の違いです。ちなみに清水先生は初期読売アンデパンダンに前衛的作家達と共に作品を出品していました。日展作家としては異例であり如何に国際的な豊かな感性を持っていたかが伺われます。このような姿勢で学生時代を終え、真っ直ぐに社会に飛び込んで行きました。グループ展、公募展、野外シンポジウムなどで鎬を削りました。”フェニックス”という3人のグループのメンバーである鈴木慶則氏より誘われ”幻触”というグループ展に参加しました。この3人内の1人は前出の武蔵美油絵出身の伊藤たかふみさんでありもう1人は石子順三という東大美学出身のキツチュアートで日本で強く推し薦めた初めての評論家として知られています。ちなみに彼は1960年代に漫画、デザイン、イラスト等日常に染込んだサブカルチャーにいち早く注目し、ジャパニーズポップを予言した現代のグラフィティアート、又バンクシーにも通じる今生きていれば日本にとってユニークな大事な美術評論家になっていたであろうと確信します。惜しくも48歳で1977年に他界しました。鈴木さんはそっくりだけれど何処か違うという作者の表現を忍ばせた”だまし絵”で質の高い秀れた作品を残しました。私が最初に彼のアトリエで見せて頂いた作品はセザンヌのりんごの騙し絵でした。伊藤さんは第1回日本アンデパンダンの作品が評論家針生一郎によって美術手帖誌上で作品の写真と共に激賞されました。日本の濃み爛れた社会を描いた”リアリズムの抽象絵画”でした。2人共、前衛美術会のメンバーであり、山下菊治、池田龍雄、中村宏、桂川寛、鶴岡政男、曹良奎等と共に、1950年代に活躍し戦後の現代アートの礎石となり、後に出てきたネオダダやもの派等に多大な影響を与えた作家達です。日本のアートの歴史に大きく残ると確信します。ちなみに鈴木さんは赤瀬川原平の千円札裁判の弁護人として彼の千円札が ”だまし絵の芸術”であり“にせ札”ではないと主張し証言台に立った人です。後年赤瀬川は自伝の中で同じ裁判で証人台に立った滝口修造にお礼として鈴木さんの “浅井忠の鮭”の”だまし絵”を買い求め、お正月にその鈴木さんの鮭の絵画を手を下げ年始に行ったと記しています。彼は鈴木さんにもお礼をしたのです。ちなみに伊藤さんと鈴木さんと私は同じ静岡県生まれで又伊藤さんは武蔵美の鈴木さんは清水東高校、多摩美の先輩でした。また”刊”という芸大40、むさび5、たまび5、約50人位の彫刻家集団に参加しました。何となくエリート臭さを感じま

したが、鎬を削るには格好の場でした。若林奮、小島広志さん等が始めた集団だと思
います。ある時、若林さんと荻窪駅前のパブでビールを飲んだ時、丁度、彼は大阪万
博で地中に埋め蓋に鍵の付けた鉄の彫刻を、制作中でした。

そこで私は”もし地球に変動が起き、全てが地中に埋もれた後、何十 万年後新人類が掘
り起こした時必要で作った生活の為のオブジェ、スペースとアートの違いを見分ける
ことが、できるだろうか”と私は聞きました。彼は”出来る”と答えました。作品に対し
て自信を持っていたのです。44年前の会話でしたが、今もはっきりと覚えています。
ちなみに同じ時、私は”ゴジラ”と共に万博のお祭り広場の前でアトラクションの仕
事、ゴジラの付き添いをしました。私が渡欧した 1970年の事でした。日本を発つ前の2
夏、30人程の若い作家が日本中から集まって、寝起きを共にして競い合うシンポジウ
ムに参加しました。山口牧生、小林陸一郎、増田正和この3氏がオルガナイザーでし
た。やる気充分の関西の新進気鋭の作家でした。後年この3人は”Q”というグループで
共同制作をしていることを知りました。中でも山口さんは京大哲学出身、異色作家と
して注目されていました。3人共何かこれからするだろうという、と思わせる迫力が
漂っていました。小林さんにはニューヨークの友人への紹介文を貰い大変助かりまし
た。恩人です。小豆島で御影石を彫りました。大阪城の石垣になった石です。朝日新聞
が取材に来ました。私の制作中の作品の写 真が関西朝日に掲載されたのです。作品は
さておいて2、3の作家が私の石を彫る迫力に驚かされました。翌年秋田県田沢湖の畔
で橡の木を彫りました。幅1、5メートル強高さ2、5メートル位の大木です。横にして
彫り最後に立てました。傍にいた山口さんはそれを見てはっきりと”増田さん、あなた
は一流に成ります”と告げるように言いました。その言葉を大事にしようと思いまし
た。山口さんは 後年美術手帖の自伝の中で”ニューヨークで一流と言われるような作家
になりたい”と言っています。何か不思議な因縁を感じ今はなき彼の分も、生きるぞと
いう勇気が湧いてくるのです。彼は私がニュー ヨークで生きている事を知っていたと思
います。ちなみに折本立身が取材した文章、美術手帖の”我等のニューヨーク”(1981年2
月号)の中で私の活躍ぶりを書いています。

卒業してから渡欧するまでの4年間ゴジラ映画の製作に関わりながら、アートを続けま
した。ゴジラ の顔を含めて全身の第1号を作った人は利光幀三という方で、彼の助手
をしつつゴジラ縫いぐるみ役者の演技中の付き人の仕事もしました。因にこのゴジラ
の役者は中島春男といい、“7人の侍”にも出演した俳優です。1950年代す。1号のゴジ
ラの顔付きは激しく怒りに満ち、悪に対する殺意の表情はこの世の物とは思えなく厳

しく、その飢えた愛に対する欲望は尽きることない激情に満ち、百万馬力の威力でこの頽廃し腐敗した世の中に、未だその墮落の窮極の痛みを感じる事の出来ない不能の人間達に、原子爆弾よりも恐ろしい、水素爆弾より生まれたゴジラは愛の一撃を落とすべく怒りに燃えていたのです。しかし同じ人が1969年に作ったゴジラは”戦争の傷痕は忘却の彼方に消え去り、月並みな平和に溺れ、快樂に酔い痴れ誰も彼もが、見苦しく、なり振りかまわず同じ甘い汁を求める族、人間達”に愛想を尽かし、もはや、血の気は無く、飢えも無く、欲望も無い、しらけた演技する顔付きのゴジラになってしまったのです。傷痕は悪魔細胞に変容、化膿し、墮落の極みで狂乱する”人間を止めてしまった輩”の頭蓋骨と大脳にその悪魔は喰らいつき、がつがつと犯し始めたのです。当然の断罪と罰です。その人間達の頽廃の成れの果てを見たゴジラは生きて行く羅針盤を見失い、絶望の淵で悲嘆にくれ、右往左往し、全く生きる張り合いと情熱をなくし、頭を垂れ号泣したのです。ゴジラはこの地球上の全ての人々に”もっともっと太陽の代わりに苦難を浴びよ”とばかりにこの世の中に永遠のさよならをしました。”中途半端ないい加減な墮落ほど見苦しいものは無い。徹底的に生きろ!もっと、もっと深い奈落の底で苦しめ! 痛み、苦悩し、もがき、朽ち果てたぎりぎりの精神と肉体で這い上がって来い!正義の陶醉を目指せ!”ゴジラは挑戦のメッセージを残し去りました。自らにムチを打ち、耐え、鍛え、反逆の牙の先鋭化を図り、再び出沒できる日を虎視眈々と待っているのです。ユーゴスラビア(スロベニア)は共産主義の国でした。貧困でした。しかし芸術に深い理解を持つ国民性を示し、ユーゴスラビア国際彫刻シンポジウムは毎年10年間日本の彫刻家を招待したのです。最高の歓待と十分な材料を与えられ思う存分出来ました。彼等は私の彫刻を気に入り、新聞全面に私の彫刻と顔の写真とインタビューの記時が載りました。しばらくして私は反省しました。貧しい国の彼等の税金で賄われたのです。初めから理解していましたが、考えさせられました。メキシコでもマヤの遺跡を見て石を積み上げた人の苦しい底辺の力を見てしまったのです。この2つの事が私をして大きく目覚めさせたのです。自ら稼いだ以外の如何なるお金にも頼ってはいけない。ささやかでもいいから自力で支えられたアートを作ること、そこから始まると思ったのです。手のひらの大きさでもかまわない。純粋なアートを目指そうと思いました。ニューヨークに行くことは日本を出る時から計画していました。米国で武者をしてみたかったです。お金も底を尽きました。とにかく行って働こうと思いました。幸い小林さんの京美の友人の彫刻家清水さんの紹介でニューヨークのブロンズ鋳物工場で働く事になりました。1時間2ドル、週40時間、60ドルになりました。家賃は月60ドルでした。清水さんはブロンズキャストの職人でもありま

した。更に西ドイツで修行する事になり彼のスペースを借りる事になりました。134丁目西側集合アパートメント半地下の小さな倉庫という感じでトイレはありましたが、お風呂と窓がありませんでした。12畳位の大きさでした。お湯は出ました。ハーレムと言って気をつけなければいけない貧民街でした。早速作品を作り始めました。伝統のあるローシェンバーグも賞を取ったという展覧会に出品しました。3等賞を取りました。選者はローレンスアロウエーという有名な60年代はポップ70年代はプライマリーアートを推す評論家でした。ほぼ同じ時にハドソンリバー美術館の彫刻展に別の作品が入選し展示されました。3月に入国したその年のことです。コロンビア大学の近くにスタジオを持つ新妻実という私より1回り年上の人と、親しくなりました。同大学で彫刻を教えていました。1972年頃彼は友人の篠原有司男のスタジオへ私を連れて行き紹介しました。これが篠原氏と現在まで交友を続ける事になる最初の出会いです。篠原氏の友人の堀内袈裟男さんが異人館リュージさんとビルディングを買いその1階の半分が空いているというのです。早速借りました。前の3倍のスペースがありました。

ほどなく1年半の後鋳物の仕事を止め新妻氏の友人の日本人のインテリアデザイナーに頼まれインディアナ州のショッピングモールの日本レストランの前に前衛的なかなり大きな日本庭園をセメントで私の意匠で作りました。少しお金が入りました。かねがね篠原氏のような大きなスペースを欲していました。ニューヨークタイムスのスペースの広告で現在も住んでいるロフトストアーフロントを見つけました。この大きなスペースはトイレもキッチンも何もありませんでした。2つベースメントが付いていました。全て自分で作るしかありません。1973年3月の事でした。アメリカに来て丸2年が経ちました。堀内さんのスペースにはキッチンと風呂が無かったので私が自分で作った代として小島信明さんに500ドルで売り彼が引っ越してきました。因みに彼は篠原氏と共にジャパニーズポップアートの草分けの1人として大事な作家です。堀内さんはニューヨークに来る前日本で読売アンデパンダンで”指で描く/フィンガーペインティング“絵画を出品し注目されました。ここからが落ち着いたという意味で本当のニューヨーク生活のスタートであったと思います。審査される一切の展覧会への出品をやめました。先ず”14スカルプターズ“という14人の彫刻家で運営するコーポ画廊のメンバーになりました。当時画廊がひしめくソーホの一角にあった小さな画廊でした。今も存在しています。飯塚国雄さんの後釜で入りました。彼は北川民次、武田鎮三郎、池田満寿夫等と共に日本で活動していた人です。1975年半身石膏の殻を纏い裸で3週間座り続けるパフォーマンスの個展をここでしました。ちなみにこの個展を見た人が、ある日、ソーホのストリートで”増田さん、増田さんと呼びかけて曰く、樋口シンです。あ

あなたの作品はすばらしい”と褒めてくれました。私の尊敬する彫刻家でした。樋口シンと山口牧生は東洋の感性を形にした他の追従を許さない高みにまで昇華させた、戦後の日本を代表する類を見ない世界に誇れる彫刻家です。1974年日本人アーティストの集まる会でヨシダミノルと会い、親しくなり彼が”ソーホアートフェスティバル”に参加すると聞き、私も参加させてもらうことになりました。ソーホのストリートを会場としたものでした。タイトルは”セルフダイジェッション”裸で鉋を持ち、生の牛の内臓や大脳を投げつけ、その度に黒板のプラッカードに”食べるな!自分を食べろ!”など書いては消すメッセージを送るという、斬新で激しい怒りのパフォーマンスでした。またコスチュームもユニークなものでした。ソーホニュースという当時新しい新聞に私のボデーアートが唯1人写真入りのニュースになりました。ちなみに亡きヨシダミノルはキネティックアートで日本では知られていますが、彼独自の宇宙感覚は欧米合理主義から生まれたコンセプチュアルアーティストの比ではない。ある日彼はソーホの目抜き道理の交差点でパフォーマンスをするが惜しくもポリスの横やりで途中止めざるを得なくなりました。私は逮捕されても遂行すべきだったと責めました。熱い夏のその日、直後のお疲れの乾杯の時でした。私と彼は次第に酔い彼は私の背中にタバコの火で焼き印炙り出しアートを始めました。二人は泥酔しその痛みは麻痺、陶酔し、彼はその怒りを私の裸同然の肉体に思い切りぶつけました。青年時代の二人の瞬間の”永遠のモニュメント“です。ちなみに100人ほどの観衆の中に南準白がお腹に新聞を晒しに巻いてパフォーマンスをしながらミノルのパフォーマンスを見守る姿を見つけました。彼/ミノルは限りなくインターナショナルな感性を持つユニークなアーティストとして将来更に評価されると信じています。その頃篠原氏(ここからは彼のニックネームであるギューチャン/本名の牛に由来、と書きます)のスタジオに頻繁に出入りし、いろいろ手助けしたり、お酒を飲んでアート論を闘わせたり、している内に、当時のアーティストは作品を貯めてから画廊のオーナーに来てもらい、見せるというのが決まりでしたが、2人共、ギューチャンは6年私は4年目に入り待っていたのではネガティブで良くない、画廊を借りて個展をやろうということになり、アズマ画廊という貸し画廊を見つけました。2人で2週間ずつ1ヶ月1000ドルでした。彼が最初で私が後でした。いよいよ檜舞台です。興奮しました。彼は廃物のカードボードをプラスチックで固めたモーターサイクルの彫刻とキャナルストリートと題した絵画でトータル10点程の大作でした。カードボード彫刻の処女航海でした。これが彼が現在も続けているスタイルの始まりでした。私はドンゴロスと石膏と廃物を使ったインストレーションで題して”死の砂ーデスサンド“死の灰を意識した作品でした。彼の作品の目新しさとキッチュ

性に注目したテレビ放送局のニュースになりました。1、2ヶ月したある日、友人が私にお前の個展の評がアートフォーラムというアート誌に載っていると告げました。早速買い求めました。驚きました。本当に載っているのです。アメリカの前衛に注目する一流美術誌が貸し画廊の無名の作家を採上げるとは、青天の霹靂でした。アメリカ文化を少し感じました。いままでに無い道を、自分で切り開いて作った道を、進んで行けば必ず何かを作れるという予感をがしたのです。ちなみにギュチャンの階下に住んでいた耳の立体で知られる三木富雄はコオデヤーエクストロームという一流画廊で個展をする予定でしたが彼が耳でない作品の展覧会を主張した為、企画は流れました。失意の内に日本へ旅立ちました。惜しくも早逝されました。(私は彼を尊敬しています)私はいつの頃からカルマニアの彫刻家ブランクーシに心酔していました。彼の怪獣キマエラという作品を見てこれこそ自然を表現した、リアリズムの極みだと思いました。彼の名前のクーシをとってクーシ増田で個展をしようと決めました。ギュチャンも俺も有司男を牛男で行くと言いました。当時の芸術新潮のアズマ画廊の宣伝広告として大きく牛とクーシが載っています。コープ画廊の作家達もなにか一流を目指す2軍選手の集まりという感じでぱっとしませんでした。私だけが桁違いでした。強い決心をしました。もはや画廊は必要ない。自分の立派なスペースで個展をしようと思いついたのです。ここから篠原氏と私は別の道を進むことになります。しかし友情は切れる事無く現在まで続いています。ちなみに彼のドキュメンタリー映画の(キューティ、ボクサー)の中にギュチャンが(マスタ!俺たちは命をアートに捧げているんだ!ネガティブはよくない!)と諭すように云い突然泣き出すギュチャンをなだめるように酔っぱらった彼を抱き抱える場面があります。暗に私のコマーシャルへの頑なな抵抗を責めています。1990年頃の事です。色々他にも、私がモーターサイクルを組み立てている場面、私のトラックでその一部を運びながら会話をしている場面等出てきます。私を縁の下の力持ちとしてリアルに捉えています。ヘルパーから始まり弟子のように彼の右腕となりライバルとして更なるアーティストとして激しく生きたいと思う私特有の情熱が垣間見られます。私の45から65歳位の時が写しだされています。彼はコマーシャル画廊が必要でしたが私は必要としなかったのです。自分にとってのベストの自分の画廊を持っていました。又働いていたので作品を売る必要がなかったからです。早速大作に取り掛かりました。2年に1度位の割合でコンスタントに個展を続けて行きました。終わった後はいつもゴジラが荒れ狂っての大きな家を2、3軒潰したかのようなゴミが山できました。身体が媒体となって空間に浮遊し時間と共に生き物のように空間を変容させる表現方法に夢中になりました。鉦と肉体が創り出す破壊と創

造、死と生の全速力のサイクルに没入して、見えてくる途方も無く遠大な宇宙の淵に生まれてくる見えない形を求めて。ぎりぎりの表現を求め続けたのです。ちなみにジャクソンポロックのドリップペインティングにも身体の動きと画面が一体となって生命に陶醉している瞬間が作り出す永遠の美を求める懸命の格闘が人の心を打ちます。彼のアクションが意味する怒りの爆発、それは彼の祖先が農民として移民したアイオワ州での苦難に満ちた耕しても耕しても石ころの大地と自然との闘い、その血のにじむ苦力の果てに手にするジャガイモやトウモロコシ、その苦難を具に見て育ったジャクソンポロックの肉体には、先人から受け継いだ激情の怨念と逆襲の意志、それらは、彼の背骨に染み入り、その鋤と鋤は絵筆と絵の具にはその大地はキャンバスに変身させ新しい時代を切り開く先人の開拓した遺産である大地の使者として、正にアースワークパフォーマンスとして怒りの激情を創造に変身させる必死の肉体の挑戦がドリップペインティングだったのだと、私に激しくその思いが重なってくるのです。生き抜く意志が乗り移って我が子のように生まれてくる形。私のこのパフォーマンスは1980年の前半まで連作として続けられます。このあたりからニューヨークのアート界は、大きく変貌することになります。ウォール街、株式市場のお金が怒濤のごとくに流れてきたのです。30代前後のスターアーティストが続々と出現したのです。一獲千金を夢見る芸術家にとって千載一遇のチャンスがやってきました。見栄えのいい作品を作る若手作家の作品が1点何億で売れる時代の到来です。次々と億万長者のアーティストが輩出しました。米国に来て15年目位の出来事です。多くの作家が売れるような同じスタイルをもとめて浮かれました。まるでファッションの世界でした。これはアートの本質とは何ら関係のない社会現象だと思いました。無視の姿勢で対峙しました。私は依然として生活を基調とした制作を続けました。世の中の喧噪は対岸の火事でした。再び、世紀末の頹廢がやって来ました。この暴力的な社会の荒波に吞まれてはいけない、更なる挑戦のための力を付けなくてははいけないと確信したのです。芸術至上主義では社会に参加していません。それらは社会の上澄みでありごく一部の無知な富裕な享樂者の慰みでありユートピアでしかありません。アメリカ社会を知らなければ、この社会の人々が、何を望み何を必要としているのか、その社会の実体を深く知り、感ずる事により何かが見えてくるのです。自分と社会の接点と共通項、生きている限り自分が求める社会、社会が求める個人、その矛盾、葛藤、対峙、生活することの厳しさを避けて生きて行くわけにはいかなのです。これこそがアーティストにとって、生活とアートの妥協のない合体への弛まぬ努力によって、確かなものを生むことが出来る原動力となるのです。アートが求める純粋な世界とは逆のシステムによって与えられる虚飾の名誉、これらは芸術の本質とは全く関係のない政治家と同じ類の墮落であり、アーティストから

その牙を抜き取るトリックであり、百害あって一利もないその汚れた濁流に流されず自分にしか出来ないもの比べようのないもの、一生賭けて自分が信じるものを探求する姿勢がアートであると信じています。システムによって与えられた数々の虚飾の勲章を芸術家というユニフォームの胸に着け、名誉という仮面を被って横行する墮落した芸術家、エリートと呼ばれる文化人の瀟灑する社会。この文化の有り様の根源が腐敗しているのです。私はニューヨークの狂気するアート界に背を向けました。もっと違うアートがあるべきだと思いました。違う人間の存在がこの社会に必要なだと確信したのです。私は更に自分を社会に埋没させることによって、不動の芸術家を目指したのです。次第に悪魔の手は私にも近づいてきました。2、3の真面目なグループ展を除いて全ての誘いを否定しました。しかしそれにもかかわらず反対に、次第に私の異色の芸術家としての評価は高まっていきました。しかし私はひたすらに、この浮き世の狂乱を尻目に、更に深く自分の道への埋没を目指したのです。ちなみに私の作品を絶賛し1981年3月号アートインアメリカ誌(米国で最も印刷部数が多い美術雑誌)に評論を書いたドナルドカスピットは直後、CRITIC OF THE YEAR/その年の最優秀美術評論家賞という米国美術界で最も権威ある賞を獲得しました。彼は現在米国で最も大事な評論家として存在しています。又その私の作品の写真をハーシュホーン美術館で個展していたルーベンキアンという米国の彫刻家の巨匠の作品と共に左右に大きく掲載し、編集者は私がファーストクラスの作家であることを示しました。投資家が投資の対象としてアートを売買する動きは次第に加熱、増大を重ね30年を経た現在に至っては美術館を初めとする、アート界全体を操る陰の支配者として強大な権力を持つようになったのです。お金が暗躍する暗黒時代の到来です。美術展はその宣伝によってお祭りとなりました。それを企み、アーティストと共にたむろする人たち、彼等は操り人形/リモコン操作のロボットに墮したのです。歴史は繰り返しにすぎないのだろうか。繰り返す為に我々は生きていくのだろうか。‘NO’です。歴史は塗り替えるべく我々が引き継いだのです。先達の必死の努力によって、来るべき未来に向かって蒔かれた実りとなるべき数々の種とその豊穡の享受、それ無くして私達の今はありません。来るべき未来は我々の懸命の努力に掛かっているのです。次の世代に引き渡す義務があります。そうでなければ豊穡の源である蒔かれた種は枯渇してしまいます。それは先達に対する冒瀆です。人類は滅亡の一路を辿ります。それは許されません。真剣に生きて行こうとする意志がなければ何も生まれないのです。アートの持つ力は蒸発したように霧散し、形骸と化し変身したのです。それは、上流階級向けの醜悪な装飾絵画に墮し、更に、飽食で腐敗した脳を刺激するまやかしコンセプチュアルアートの類いになり下がり金満家を刺激するに十分なその色彩と大きさと艶やかさとダイヤモンドに象徴される高

価な材料に支えられた奢侈で膨れたお腹のような巨大なオブジェ彫刻に成り果てたのです。誰が悪いのでしょうか。誰も悪くはないのです。単なる世の中の動きにすぎません。何を作るのも、何を買うのも自由です。個性が持つお互いの立場、姿勢、表現、意見、性向、好き嫌い、人種、格好、全ての人が持つ長所と欠点、持って生まれた身体ハンデキャップ、老若男女、貧富、地位、身分、人が持つ過去、そのお互いの”違い”を解り合うことによって、他人を認める事によって、他人も自分を認めてくれるのです。他人は自分には無い才能を持ち、自分は他人が持たない才能を持っています。お互いに個人のオリジナリティーを必要としているのです。諸々の個性、才能の違いとそのお互いの距離を持つ”differenceとdistance”を尊重する事によって生まれてくる連帯、個人を疎外しない社会の基本的な人権が生み出す確かな個人の存在の群れる社会。百花繚乱の豊穡の夢と現実の交錯、過酷な肉体労働、苦力を強いる金権の圧力をしたたかに生き抜いた肉体が手にする束の間の甘美な陶酔と絶望の幻惑。ありとあらゆる虚実の渦巻くこの社会をどう生きていったらいいのだろうか。自分の持っている全てを結集し、真実、正義、勇気を持って目的にに向かって全力でぶつかる以外に方法はありません。。急がず、焦らず、望みを棄てず地道に生きて行けば必ず”夢”を手にすることが出来るのです。1999年ロサンゼルス現代美術館が企画した1949年から1979年の戦後30年間に展示発表された世界中の作品の中で最も重要とされる120人の作家を選んだ”パフォーマンスとオブジェからの”というタイトルの大規模な美術展が開催されました。オーストリアの首都ウィーン、スペインのバルセロナ、日本の東京現代美術館を約1年を懸けて巡回するというものでした。日本からは日本のキュレーターが選んだ作家達でした。草間弥生、小野ヨーコ、田中敦子、赤瀬川原平、篠原有司男、土方巽、中西夏之、工藤哲己、白髪一雄、具体派、南準白、ヨーロッパからジョセフボイス、イブクライン、ハーマンニッチ、ジャンテインゲリー、フォンタナ、ピエールマンゾーニ、ミケランジェロピストレット、ジョージマチュウ、グループとしてのフルクサス、アメリカからはジャクソンポロック、他と共に私がえられたのです。この道の一流のアメリカンアーティストとして認められたのです。これは青天の霹靂ではありませんでした。私の作品を多くの美術雑誌は何回も採上げ、アメリカのアート界にとってコマーシャルでないファインアーティストとして、大事な作家であることをその道の人達は知っていたからです。選ばれたアメリカ作家の中では最も若い世代に位置し、ハナウィルキ、アナメンデイエータ、クリスバーデン、ビトウアカウンチ、ゴードンマッタクラーク、ブルースナウマン、デービッドハモンズ、クーシマスタ等は1940年代前半生まれの人達です。これらの作家達は1970年代を真摯に活動したアンチシステムの姿勢

を持ち、それぞれが独自の表現と場と思考で活動しました。唯1つ共通しているのは身体を作品の媒体としたことです。結果的には前衛だったのです。前衛とは命を懸けて、最前線で闘うのが使命です。死を賭けて最前線で戦う肉弾の姿勢こそAVANT-GARDEの使命です。消えるのは当然の結末です。しかし本当は消えていません。依然として同じガッツを持ってしたたかに活動をしているのです。肉体の消滅の瞬間/死/完結によってパフォーマンスアートが蘇生するというこの逆説、パラドックスへの賭け、全身全霊の肉体をぶつけるアーティストとアートワークの可能な限りのオーバーラップ/重なり、同時性、繋ぎ目のない一直線の永遠性への賭けこそ、このアーティスト達の究極のSOUL/魂であり、これこそパフォーマンスアートの本質であると私は確信しています。ちなみに他のアメリカンアーティストの選ばれた作家の名前を一部記します。ジャクソンポロック、ロバートロウシェンバーグ、クラウスオルデンバーグ、ロバートモリス、等です。この美術展の正式な名前は"アウト、オブ、アクションズ"です。アメリカではアートがそのスタイルに関わらず、例えば、アンドリュウワイエスのリアリズムとジャクソンポロックの抽象絵画は同じ比重でアメリカ文化として受け入れられ、そのどちらも否定しません。その価値は時間、歴史が証明します。時の流れと共にふるいをかけたように、生き残るのです。自然の理です。両方ともパイオニアです。私は伝統と歴史を受けて立つ前衛が好きです。肯定と否定、生と死の狭間でもがき、苦悶する、自らに突き付ける存在の懐疑、自分の使命を遂行できなければ、子孫とその人類は滅亡すると思う事は、その誇大妄想と被害妄想に陥った迷妄なのか?アイルランドの渡り鳥の鷺は真冬の厳寒の吹雪の中で1日の殆どを卵の孵化の為に餌を探しまわり、その寒さの中で小鳥に飛び方を教え、渡れるようになるまで小鳥を育て、家族で食べ物の豊富にあるアフリカに渡るのです。又冬になると子育ての為に戻ってきます。何故、アイルランドの鷺はアフリカの楽園に定住しないのでしょうか。誰も理解出来ない神秘だと言うのです。私は理解出来ました。最も厳しい自然の中で育てることによって子孫は地球上のいかなる場所でも生存できるのです。子孫を残す本能が探し求めた唯一の道です。迷妄ではないのです。人間も全く同じです。自らを自然界のありとあらゆる天敵に晒しその厳しさの中で、ぎりぎりのサバイバル本能が掴む一生かけても尽きる事の無い遠大なテーマと目的を探し求め、克ちとるべく毎日を生きて頑張るしか道はありません。これを避けて生きるわけにはいかないのです。簡単に手に入れた物は簡単に消えて行きます。努力して手に入れた物は簡単に手放しません。一生をかけて作られた物は国家の遺産ではなく、社会の遺産として必ず残ると信じているのです。残さなくてはなりません。邪悪で不毛な国家体制によって支えられた社

会の温床としての、その組織の純粹培養によって育まれたエリート特権階級がリードする文化構造、巧妙に宣伝されたからくりの似非文化、その組織に巧みに癒着しごまをするハイエナと化した似非前衛、現代作家。詐欺師まがいの美辞麗句とトリックとしてのレトリック、精神分析学、心理学、哲学、数学その他ありとあらゆる雑学を援用し身に纏う作品と作家に翻弄され、たぶらかされるその取り巻きと作家のゲームとしての数々の悪事、公金の私有化と乱用が横行するこの現実、自信の無いグループのペテン、これらは抹消/ターミネイトされなければなりません。誰が弾劾し修正するのでしょうか!覚めた社会です!ゴジラがいれば鬼に金棒です!この自然に逆らう何時の時代にもある悪の遺産ともいえる今は見えにくい実体のない権力によってプロテクト/防備された人工的虚構文化、特殊階級人間、選ばれた人間だけがいい思いをする巧妙に作られた人工社会は必ず腐敗し崩壊するのです。百害あって一利も無い私利私欲が充満する偽りに満ちた作品群、どこから来たか得体の知れないの富/搾取で作られた虚の館である私立美術館/現代美術館からダンプカーでそのポイズン/害毒が一掃される日が待たれます。そうなる前に自然淘汰されるのが理です。何が価値で何が不毛なのか。見透かす眼を持たなくては成りません。真実の価値だけが生き残ります。時間がかかります。人間の歴史はこれから開かれると信じています。先達の辛苦の結晶である尊い遺産の背中におぶさって私達は生きています。自分の一生だけが良ければいいとする利己主義の瀰漫、横行する現代に何が必要とされるのでしょうか。彼等に委ねるわけにはいきません。利己を棄てて命を賭けた使命を社会に捧げる無償の行為、その私達の情熱に未来は懸かっているのです。この先達の賜物を更に磨きをかけて、私達が新しく蒔く種を来るべき世代につなげるよう個々の才能と叡智を全力で捧げられたらと希求します。最後にここまで私が生きてこられた裏に多くの方々の助けと導きがあったからこそ、私の今があると思うのです。それは生まれてからアートの世界に入るまで、そして自分の形と道が朧げながら見えてくるまで、その先をなんとか自立して生き抜きしっかりした自分の世界を見せることが、自分にとってのライフワークの遂行ができるまで、全ては社会の人々とのコミュニケーションによって徐々に作られて行くのです。ここに私がどんな人々に出会い又人の作品を見てあるいは読書を通じて、それがいかに掛け替えのない人々でありどのように私の成長に影響を及ぼしたか年代を追って記して行くことによって、これからの皆さんが未来に向かっての人生にとって、未知の人々との出会いをどう生かして行ったらいいか参考になればと願うのです。有名、無名は全く関係ありません。関係あるのはまず自分の真心と人の真心が感じ合うことです。計算したり損得を考えたりする邪心を持たないことです。アートは真心、まごころ、汚れのない心を持たない人には見えてこないし、作ることも、本物の人間に出会うことも出来ま

せん。これは私が72年間生きて体得し到達した哲学です。これは人間が生きて行く上で何よりも大切なことです。歳をとれば汚れて行くと世間は言います。それは間違いです。真心を持っていればますます人間はピュアーになり本質に迫るのです。生きていく事で心は洗われ磨かれ、生きている限り勉強と成長を続けることができるのです。人々に戻ります。先ず中学2年の時出会った絵画教師 青野裕彦です。彼は私の心を見てくれた最初の人です。彼の純粋な心が私に響きました。ビジュアルアートに心酔し現在に至るスタートラインでした。高校での出会いは前出の武蔵美油絵出身の伊藤隆史です。前衛芸術家の小池一誠は教師でした。高校の美術仲間に常盤勇と田代盛武がいます。常盤とは高校2年清水銀座で二人展をしました。彼はコンピューターのノイズ版画で知られていますが惜しくも事故で早逝しました。1年先輩の田代氏はムサビ日本画出身現在静岡で呉服店を経営しオリジナルデザインで活躍をしています。その彼が私が日本を出る時木彫タイトル”放蕩息子”を10万円で買って助けてくれました。私の何かを見てくれた恩人です。ムサビで出会った師は前出の清水多嘉示です。又ゴジラの映画の制作に共に携わった武蔵美彫刻科の先輩、富樫一さんには、制作の面で多大な影響を受けた身近な人です。ムサビでは大事な展覧会仲間がいます。2年先輩の今は亡き石彫の岡本三千穂はムサビを卒業したある日私に”刊”というグループに入らないかと私の学生時代の作品を見て勧めてくれた人です。これは私にとって社会人作家として試される試金石としての第一歩となったのです。この青年彫刻家集団は殆ど東京芸大出の美術学校の教師をしながらプロを目指すつわものエリート達でした。彼らの殆どはユーゴスラビア国際彫刻家シンポジウムへの参加を目指して凌ぎを削ったのです。年に1人か2人の彫刻家にとってのインターナショナルへの狭き登竜門でした。同時に岡本三千穂、水島道雄、松本進、高梨誠一郎、新悠喜雄、私の6人で ”野火” (命名は高梨) というグループを作ってトキワ画廊で作品展をしました。上野の行動美術という公募展に出品し2年連続受賞、新進作家として認められることになりました。行動の建畠覚造 (いち早く戦後モダニズム、抽象彫刻を始めたパイオニア) は私の作品は素晴らしいと褒めてくれました。作品を出すごとに多くの人に褒められましたが、実のところ納得がいきません。作品が本当によく出来たと思わないからです。精一杯尽くしたけれどまだまだ突っ込みが足りない、褒められるにはまだ早いというのが本音です。卒業して3年目にチャンスが舞い込みました。ユーゴスラビア国際彫刻家シンポジウムに招待されたのです。この年はシンポジウム10年目で毎年1つの素材でしたがこの年は4つの素材 (石、鉄、木、セメント) で招待するというのです。日本から選ばれた5人の中に入ったのです。岸田克二、三浦重雄 (以上ムサビ) 大成浩 (芸大) 、村上泰造 (京美) と私の5人でした。先の岡本さん無しではこの事は起きなかったと思うのです。イタリアのミラノで吾妻謙二郎さんを訪ねました。ユーゴの作品を見てもらいました。彼曰く100の連作を見せろと言うのです。驚きました。その後ニューヨークで彼と同世代の新妻実さんに会いその後篠

原有司男会氏に会うこととなります。私より以前の外国を目指す芸術家のほとんどは上流階級、比較的裕福な子弟あるいは国内で成功した人たちだったと思われます。同じように美術学校へ行ける人たちも家族のサポートがな無ければ難しかったと思われます。しかし戦後育ちの私の世代あたりから経済の初期高度成長の恩恵を受けなんとか自力で外国に出ようとする人が出てきたと思われます。私の知る限り自力で外国、ニューヨークで働きそのお金でロダンの下で勉強した明治の西洋の文化の影響を受け、それを摂取し独自の自らの感性を表現したパイオニア彫刻家萩原禄山がいます。明治の西洋文化摂取時代の彫刻家でしたが独自の作風を示し現代に至る始まりとしての道標を建てた永遠不滅の輝く存在を示しています。彼も決して自分一人で世界を築き上げたのではなく、彼の周りに生まれ故郷安曇野の人々、又多くの友人、高村光太郎等心の優しい人々がいたからです。彼の心がやさしかったからです。人は必ず人の影響や助けによって成長し社会の中で生きて行けるようになるのです。彼は夭折しました。彼の宿命、短命が彼の才能に磨きをかけたと結果論になりますが思うのです。ここで私が何故ニューヨークを目指したか少し書きたいと思います。日本に帰らないで外を見たかったのです。出品できるニューヨークと近辺の全て展覧会に出品しました。素直に自分を試して見ました。そうする事で自分が見えてくると思ったのです。自分を晒すことによって 過去を捨てる事が出来る。絶えずゼロ、無であることが、絶望と希望の真っ只中での暗中模索が欲しかったのです。武蔵を尊敬しています。命をかけて、肉体をかけて食えない飯を食い最後の数年でその生き様、生き地獄をアートに昇華させたその生きる執念、まさしく生は芸術であり、真のパフォーマンスだったのです。北斎を鏡にして現代アートを映せば、50、60歳の現代作家の作るものは鼻垂れ小僧の玩具遊びに過ぎない。故に長生きをしたい。北斎が自分に喝を入れる意味で言いました。いかにアートの歴史に刻みを入れることが難しいのか反省せざるをえません。アメリカ人のお世話になった人、親しくした優秀な作家等割愛させていただきます。この”生活とアートのドキュメント”の文章は名古屋芸大でのレクチャーの為に書かれたものですが、時間の制約で出来なかった部分を、今回間違いを修正、加筆して一応私なりの形にしたものです。

未完 6/12/2014 クーシ増田

追記

一部敬称を略させていただきました。

。たと年中ばから2010年頃迄の、私の埋没の実体は別の機会 に書く予定です。